

尻屋磯根資源調査 (要約)

藤川 義一・田村 直明*・山田 嘉暢・松尾みどり・桐原 慎二

目 的

尻屋沿岸の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

材料と方法

平成20年6月10日に、太平洋に面する尻屋沿岸に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計66調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方で2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。底棲動物のうち、エゾアワビについては殻長を測定するとともに、貝殻頂部分の着色から人工種苗を判定した。6調査線から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計160個について生殖腺重量を測定し、身入りを求めた。

結果と考察

2年目マコンブ

2年目マコンブは、水深5mの1地点でのみ採取された。2年目マコンブの生育密度は、過去10か年では平成12年、平成15年、平成17年と同様に低く、昨年の1/76の値に留まった。このため、平成20年のコンブ漁は不漁と懸念された。

1年目マコンブ

1年目マコンブは、生育密度が平均28.8本/m²で昨年に比べ6.8倍高かった。1年目マコンブの生育密度は、水深5m、10m、15mではそれぞれ56本/m²、31本/m²、32本/m²と浅所が高かった。このため、平成21年のコンブ漁は平年並みと期待できた。

エゾアワビ

エゾアワビは、調査地点全体の28%に相当する19地点から38個体採取された。エゾアワビの生息密度は、昨年に比べ27%低い0.3個体/m²で、浅所ほど高かった。殻長9cm以上の個体は、昨年に比べ4%少なく、殻長9~10cmの個体が減少していた。一方、殻長9cm未満の個体が半数を占め、来年以降の漁獲への加入が期待できた。放流貝の占める割合が52%と高かった。

キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、全体の89%に相当する59地点で採取され、生息密度が平均3.1個/m²、現存量が平均229g/m²と調査開始以来高い水準を維持した。水深15m以深では殻径40~50mmの小型個体が多く、資源への加入が考えられた。キタムラサキウニの身入りは、最近数年間で最も低く、水深2.5m、5mでは15%前後、10m以深では8%以下に留まった。

調査海域ではキタムラサキウニの食害による磯焼けの発生、持続が懸念されたため、キタムラサキウニを積極的に除去する必要があると考えられた。

コンブ目海藻とコンブ目以外の海藻

コンブ目海藻は、マコンブ、ワカメ、スジメ、チガイソが採取され、現存量はそれぞれ平均86g/m²、117g/m²、47g/m²、0.5g/m²でワカメが最も多かった。コンブ目以外の海藻は、ホンダワラ類ではアカモク、ウガノモク、フシスジモクが1~3地点で249~1,472g、そのほか、ケウルシグサ、ウルシグサ、マクサ、ヌメハノリなど30種の海藻が平均1,526g/m²採取された。マコンブ以外の海藻が多く生育する場では、キタムラサキウニの移植場として利用できると考えられた。

発表誌：平成20年度尻屋磯根資源調査結果報告書、青森県水産総合研究センター増養殖研究所、平成20年7月。

*青森県下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所